

阿部正雄の逆対応概念理解の射程 ( The Conception of Inverse Response in Abe Masao )

菅原 潤 (Sugawara Jun) (日本大学)

逆対応は後期西田哲学を解き明かす鍵の一つだとしばしば見られてきたが、もともとはキリスト教の立場の滝沢克己と禅仏教の立場の久松真一等との論争を通じて注目された概念であり、その久松の弟子の阿部正雄が逆対応の概念を提示することで不可分・不可同・不可逆をめぐる論争が一段落した経緯を見てから、論じられなければならない。

先ず阿部はキリスト教と禅に代表される仏教をそれぞれ恩寵の宗教と覚醒の宗教と見立てたうえで、二通りの逆対応が存在すると論じる。それが前者における不可逆的な逆対応と、後者における可逆的な逆対応であり、また絶対的超越面を内在化すれば覚醒の宗教に、絶対的内在面を超越化すれば恩寵の宗教に移行すると考える。言うならばこれまで原理的に対立すると見なされてきたキリスト教と仏教の関係を、逆対応の概念を用いて説明しているということに注目しなければならない。以上の議論を阿部は務台理作の『場所の論理学』の議論を踏まえたうえで、西田の最後の完結した論文である「場所的論理と宗教的世界観」を援用して展開している。またこうした二つの立場の相互転換の可能性を等閑視して、恩寵なら恩寵の立場を覚醒なら覚醒の立場に固執すれば、魔の領域に入り込む危険が生じると阿部は警告する。

こうして見れば阿部正雄による逆対応の解釈は、現在の世界でも見受けられる相異なるタイプの宗教同士の対立や、自身の宗教的立場を堅持することの戸惑いや改宗の過程を哲学的に説明する視点を提示する点で、意味深長なものを受け止められるだろう。絶対矛盾的自己同一の立場を確立した西田はその後自身の論理をさまざまなジャンルで応用する試みを死の直前までおこなっていたが、こうした阿部の解釈は西田哲学の一つのポテンシャルを示唆した点で今もなお評価すべきだと思われる。